入選

思いからの行動へ

鹿児島県　根占中学校　二年
川畑　栞音

１年生の夏。部活終わりの通学路は、とても暑かった。黒く焼けた腕と顔には、汗が流れていた。家に帰る途中のできごとだった。何やらホースがからまっており、苦戦しているようだ。見るからに大変そうだったが、私は素通りしてしまった。頭の中では、声をかけて手伝った方が良いのか、と悩んでいた。しかし、行動に移すことができなかった。通った後も後悔が残った。

「自分は困っている人を助けることができなかった。」

私は、自分のことを振り返った。今まで自分が苦しいとき、大変なときに励ましてくれたり手伝ってくれたりした人がいた。そう思ったとき、なぜか私は走って引き返していた。まだそれほど離れていなかったため、走って１０秒ほどで着いた。

その高齢の方は、まだホースに苦戦していた。しかし、話したことのない人と話すのが苦手な私は、すぐに話しかけることはできなかったが、勇気を出して「手伝いましょうか。」と声をかけてみた。少し驚いた様子で私を見た高齢の方は、「あら、手伝ってくれるの。」と、私に向かって言った。私はつい、笑顔で「はい。」と答えた。

少々苦戦したものの、ホースはしっかりとほどけた。花に水をまくためだったらしいが、猛暑の中ホースに悪戦苦闘していた高齢の方はとっても疲れていた。

「私が水をまきましょうか。」

そのときの私には、何でもできそうなくらいの自信に満ちていた。とても暑い昼間だったはずが、そんなこと感じないくらい私は嬉しくてしかたなかった。初めて人に声をかけたこと、お礼を言われたこと、思っていたことを行動に移せたことすべてが。

水まきを終え、ホースを片づけると、学校や部活のことなど少し話をした。とてもすてきな笑顔で楽しく話してくださり、私はとても良い時間を過ごすことができた。「さようなら。」と言い、私はいつもの通学路を通り、家に向かった。周りは田んぼばかりで、人もいなければ風も吹かない猛暑の通学路だったが、私の周りにだけさわやかな風が吹いたような気がした。

人見知りで臆病でコミュニケーションが苦手な私に、新しい空気を取り入れてくれるできごとだった。「誰にでも親切にできるようになりたい」。それは、思うだけではいけないこと。行動に移さなければ、意味のないことであると感じることができた。

これからは、自分のダメなところを理由にして逃げるのではなく、克服しながら「親切」を大切にしていきたいと思う。新しい発見や出会いを見つけられ、互いが笑顔になれる。「親切」のメリットであると私は思う。

「おばあさん、こんにちは。」「こんにちは。この前はありがとうね。」

「いえいえ。とんでもないです。」

思いから行動へ移すことの大切さを実感した体験だった。